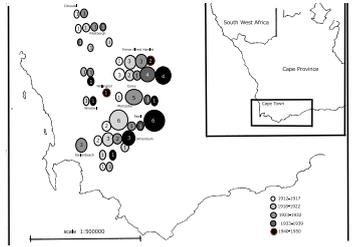


# 成果報告書

記入日 2017年10月20日

氏名	宗村敦子	渡航先国名	南アフリカ共和国	所属機関	The University of Cape Town, Dpt. of Social Anthropology
研究テーマ：「南アフリカの労働集約型工業化過程における農村間労働移動の実証的研究 —1930年代西ケープ果樹農場と缶詰工場の季節労働者の事例から」					
研究期間	2016年9月～2017年8月				
研究成果（概要）					
申請者は留学中、博士論文の一部の執筆のため、事例研究として南ア西ケープ州に位置する缶詰工場の労働力構成と農場におけるリクルートルートの史的分析に携わった。					
研究成果（詳細）					
<b>1. 調査内容の概要</b>					
<p>本調査は博士論文「南アフリカの労働集約型工業化—1930年西ケープにおける労働共有型地域経済の形成」の執筆のため、事例研究として取り上げる缶詰産業についての資料収集を目的とした。この研究は労働集約的産業に焦点をあてた近年の工業化論について南ア経済史の事例を提示することで、グローバル・ヒストリーで現在議論されているアジア・アフリカ・ラテンアメリカ特有の工業化の下での労働利用を浮き彫りにしようとした。約1年の調査では、女性人口が極端に少ない西ケープ地域でなぜあえて女性労働に依存した産業が形成されたのかを農業経済史から明らかにするという課題に取り組んだ。その一作業として申請者は、「白人農場における季節労働者がどのような農業カレンダーに従い、いかなる雇用方法で缶詰産業に集められていたのか」について文書収集と聞き取り調査を行った。</p>					
<b>2. 成果の要約</b>					
<b>(1) 果物農場における雇用制度</b>					
<p>西ケープ内陸部地域経済としての農村工業が誰によって形成されたのかをめぐり、まず本研究は18世紀以降オランダ東インド会社への主たる輸出産業として続けられてきたワイン産業と、1930年代の缶詰産業の出資者となっていた果物産業の経営状態を整理した。ここでは会社の設立登録に掲載された果物農場についての銀行資料を用い、彼らが地域内では第一次世界大戦後に参入した新興の中小農場主集団であったことを明らかにした。</p> <p>同様に彼らの具体的な生産コストについて1936年に110農場で行われた聞き取り調査記録を使い、果物農場は不安定な経営状態にもかかわらず労働コストに40%近い割合を割いていたことを突き止めた。</p>					
					
					<p><b>西ケープ内陸部の果物農場 1912年～1945年</b> 出典：S. Siegfried (1983) pp. 84-87, 108-113から執筆者作成。</p>

この生産コストの特徴は、経営規模が大きなワイン産業や小麦産業と異なる特徴であったが、それは以下の事情のためであった。

- ・ ワイン・小麦産業は奴隷解放以降のリクルート手法として「ドップ・システム (Dop System)」と呼ばれる報酬制度に依存し、ワインや食事などの現物を賃金の一部 (Dop もしくは Tod) として支払っていた。果物産業と比べた賃金表では現物供給に相当する賃金を、果物農場主たちは意識的に労働者に提示してワイン農場から「農場徒弟 (Farm Servant)」を引き抜いていた。
- ・ 果物農場での農場徒弟には 1920 年代に進められたスキル集約化に適応することが求められ、農場滞在期間の長期化が起きていた。スキル集約化は果物生産が輸出産業としての展開を念頭に拡大していたことを背景にして起きており、農場徒弟には常時の剪定から収穫後の保存までの専門知識が求められた。
- ・ 産業のスキル集約化過程で強調されたのは、ドップによる日雇い労働の募集をやめ収穫期の追加的労働でさえも家族雇用を徹底することであった。具体的には果物産業では男性労働者に頼るワイン・小麦産業とは異なり、農場徒弟の妻や娘など女性を「季節労働者 (Seasonal Worker)」としていた。

従って季節労働に男女のいずれの徒弟を用いるかに果物とワイン・小麦産業の労働力構成の違いがあったが、短い収穫期の開始期が毎年の降雨量によって一ヶ月以上左右されるという共通の問題に異なる対応をとった。すなわち後者は酒の密売や配布を唄って都市や鉄道労働者を短期間で集め、他方前者は賃金インセンティブで労働力の定着と近隣の農村間の移動への引き留めを図った。とくに果物産業では農場徒弟家族が住み込む農場でこそ収穫作業は無償労働だったものの、他の果物農場へ「出稼ぎ」をする場合には賃金が発生し、収穫期の終了時に翌年の雇用契約を結ぶことができた。

## (2) 農場と工場における労働共有関係

1932 年以降 30 企業にまで増加した缶詰工場は西ケープ内陸の鉄道輸送網が未完成的な小町村に向けて広がり、ほぼ全ての企業設立者は果物農場主か果物輸出業者、ジャムなどの加工工場の保有者等で占められた。そうした農場主はワイン農場主たちの資産規模の 10 分の 1 程度にあたる中小規模にとどまっていたが、中でも工場周辺の農場主の収益は加工用の原料出荷に依存していた。1920 年代の果物輸出産業の本格的展開から 1930 年代の缶詰産業の開始までには、農場主と工場主の間の経営上の相互依存関係が形成されていた。

缶詰産業は一回の収穫期に各工場に 200 人の女性労働力が必要とされた労働集約的産業であり、1930 年代はじめの「缶詰工場主」は農場の小屋を改造した作業小屋で缶詰生産工程の一部を済ませていた。加工作業に使われた季節労働者は、これまで作業小屋で収穫から出荷前の乾燥作業等に従事していた上述のカラード女性労働者であった。缶詰産業開始後 6 年後に大量生産制が導入された後も、中核的な作業工程であり労働集約的な「下ごしらえ作業」は缶詰加工工場から分離された広い作業小屋で収穫期にのみ一斉に行われた。

工場主である果物農場主たちは設立当初からカラード女性を「安価な労働者として用いられる」という点で重用視し、そのリクルートのために労働提供者である農場主に対して手数料を支払っていた。これを受け取る果物農場では前述の理由から全体の生産コストの 40% 程度を労働者にかけていたが、缶詰工場経営簿でのリクルートのための出費はわずか 2% であった。この依存関係により缶詰工場主は、農場での収穫作業後 9 ヶ月間続く加工作業のための大量の労働力をリクルート・エージェントに頼らずに一度に確保することができた。

### (3) 農場から工場への移動を促す季節労働者の賃金傾斜

缶詰工場における女性の「季節労働者」は安価な労働者とされたものの、以下の賃金表の分析からは以下のような賃金上昇の仕組みが認められる。

- 下表の左側の各職能のうち「労働者・従業員」は工場では12月～翌年8月に稼働される「作業小屋」の中でまとめて「季節労働者」と呼ばれる。両者の区別は機械作業に従事できる資格があるかにあり、カラード女性が従業員数を占めていることがわかる（グラフ帯横の数字を参照）。他方労働者は最大の非熟練集団であり、カラード男性はここに集中した。工場での中核的な人種集団カラードのうち、女性がスキル職を担っていた。

- 賃金上昇幅の区別はあくまで性別に基づくために、従業員と労働者のスキルの違いは昇級範囲には反映されていなかった。カラード女性従業員が「安価な労働者」と呼ばれたのは、たとえスキルを持ったとしても平均賃金（週給 14s.11d）が男性労働者の水準（週給 1£.2s.5d）を大きく下回ったからであった。

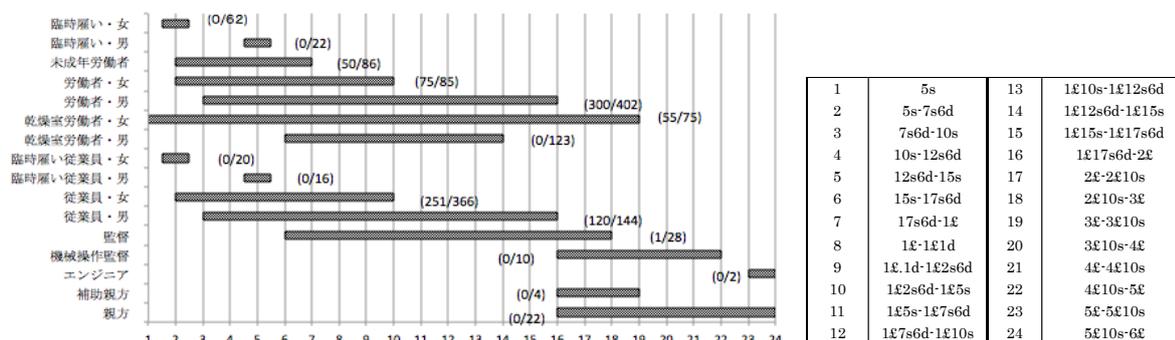
- 従業員同様カラード女性が多い「乾燥室労働者」は農場に配置され、工場未経験者はまずここに集められた。出来高払い制度が適用されたこの工程の賃金上昇幅は白人男性が占めた監督職と重なる賃金上昇幅が確認できる。従って工場では、労働集約的な作業工程のリクルートのために最初の季節労働に賃金を多く払い、その翌シーズンから昇級インセンティブを与えつつ安価なスキル労働者を多く集めていた。

グラフ 缶詰工場における非熟練職の給与範囲 1941年

出典：Department of Labour [ARB 3245 1183/12-2]から執筆者作成。

注1) X軸はグラフ5の右の賃金階級表に対応。表は労働省の賃金調査表の区分に従っている。

注2) ( )の数字は(カラード/各職能の従事者数)を表している。



### 3. おわりに：調査をもとにした執筆成果

申請者は留学期間から帰国後にかけて以上の研究成果を総括して発表した。

- 博論執筆の序章の一部を申請者は留学期間中ケープタウン大学 African Studies Library 等でもいただいた助言をもとに、南ア経済史の動向や現地文書館の利用可能性をまとめた。同論稿は「研究動向 『新しいアフリカ経済史』におけるイノベーション—統計利用による南アフリカ工業化論の新展開」『思想』1120号、2017年8月、139～149頁で発表された。
- 詳述した上記の成果は、2017年9月末に提出された博士論文のうち第4章「1830年代西ケープ内陸部の賃金経済—果物産業と缶詰産業における季節労働コストの共有」、第5章「1930年代西ケープにおける季節労働者—果物農場と缶詰工場間の農村間移動分析」としてまとめられた。

## 留学中の生活・研究でのトピックス

### □セキュリティについて

- ・ 渡航期間中全国的に大学での学生運動が起きたため、到着後 1 ヶ月は登校できないまま調査に着手した。大学のウェブサイトでは毎朝開校情報が流れたとしても直後にプロテストが起きて閉校になるなど、安全確保については正確な情報の入手が難しく自己判断に委ねられていた。
- ・ ケープタウンのショッピング・モール内の銀行支店前に設置された ATM ブースの中で銀行カードの盗難にあった。制服行員が突然入ってきて「Cardless Service」の操作を始め名前と暗唱番号を打ち込むよう指示し、言われたままに操作したところカードを持ち去られた。慌てて別の行員を呼んだところ通報を断られたため、警察署へ自身で届け出をしている最中に現金を引き出された。幸い調書が残ったため速やかに盗難金額が保証され、3 ヶ月後にカードも再発行された。
- ・ 大学街のショッピング・モールでの買い物帰りに、5 メートル後方に立っていた警官が反対方向に向かって発砲した。前を歩いていた客が走り出したのをとっさに見つけ、発砲と同時に頭を守り走って逃げたため難を逃れた。

### □留学中に築いた人的ネットワーク

- ・ インタビュー調査では西ケープの缶詰工場 Langeberg Ashton Foods を訪れ人材マネージャーの他、工場退職者に聞き取りを行い、また施設見学の知見を博士論文の肉付けに役立てた。
- ・ これまでの調査で訪れたことのなかったヨハネスブルクの Standard Bank Heritage Center を訪ね、缶詰工場への出資者である農場主についての銀行資料を閲覧した。保管された資料体系について知見を深められたことにより、博士論文後の研究テーマへ活用できることが期待できる。

写真 1: Langeberg and Ashton Foods 社 Ashton 工場の様子 (撮影日: 2017 年 7 月 18 日 西ケープ州)



写真 2: Langeberg and Ashton Foods 従業員および元従業員の方とのインタビュー



### 今後の社会貢献

申請者は 2012 年以降の不況から近年労働集約的産業を中心に製造業の立て直しをねらっている南ア商工省の「産業政策行動計画 Industrial Policy Action Plan (IPAP)」を取り上げ、その集中支援事業に掲げられた食品加工産業の史的分析を果物農場経営と接続することを試みた。スキル育成と農村部への労働者の定着は IPAP が取り組む具体的課題であり、申請者は北欧米の缶詰産業とは異なり労働集約的生産体制を続けてきたケープの特徴を、農場から工場への労働移動分析を使って明らかにした。とくに現地の缶詰加工企業におけるインタビューでは産業成立の歴史的経緯についての研究成果をフィードバックし、逆に工場での技術教育の方法や今後の課題、また日本企業との関係について話を伺うことができた。

申請者は今後同地域の工業化史に関する単著執筆に向けてさらなる研究を進める予定である。とくに留学中には論じ切れずに終わったマクロな人口史・家族史的分析を今後書き足すことで現在の南ア経済史では切り離されて論じがちな工業化との接続を試みる。それにより「工業化と都市化による全国的な農村流出期になぜ西ケープ内陸部でのみ労働集約的産業が可能だったのか」という課題の実証的な追求を続けていきたい。